

運動部に入るのこれが最後のチャンスだと。ちょうどジャンボ鶴田や長州力が大学のアマレス部からプロレス入りしたのが報じられていたので、よしオレも大学にアマレス部があったら絶対に入ってる、と。

でも先輩がすごく良い人で、ぜんぜん体育会的な上下関係がなくて、弱かったけれども、鎖骨を折ったりもしたけれど、卒業まで続けました。

谷岡 研究の方はどうだったんですか？

大野 大学でも自治会活動などをしていましたが、卒業は元学生生活動家三十人ぐらいいんタビュールをして一九六〇年代末の東大闘争について書きました。

全共闘系、共産党系を問わず魅力的な先輩たちでしたが、特に全共闘代表だった山本義隆さんは私が直接会った人の中で三本の指に入る頭が良い人でした。こっちが一生懸命調べて「〇月〇日には何があったんですか？」と質問すると、闘争から十年近くたっているのに山本さんは「あーあの日は〇〇派が〇千人集まってー」と即答するわけですよ。もちろん頭の良さは記憶力だけではないけれど、あの突き抜けるような頭の良さは驚異でした。

学園闘争は末期は党派の内ゲバなどが起こってしまい、今はその面が強調されて伝わっています。でも院生だった山本さんなどは、のちにI・イリイチが脱学校論を唱えたり、M・フーコーが知と権力の関係を問題にしたような、教育や研究、科学や大学等が無前提的に良いものか？を自己否定という形で先駆的に問うたと思います。これはその後の公害、薬害エイズ、原発などの問題ともつながると思います。

何か酔って話が長くなっていますが(笑)、そういう問いかけが、高校生の私の大学への進路不安にもつながっていた、と今に思っていますね。なお卒業論は、部分的ですが、小熊英二さんが『1968』(新曜社、二〇〇九年)に引用してくれています。

谷岡 「心の花」に入ったのは大学院に行ってからですか？

大野 これも不思議なんですけど、一方でいつか文学をやろうとずっと思っていて、漱石やソルジェニーツィンなどを読んでいたんですが、いつ、どう「文学をやる」のか？具体的なところが全くなかったんですよ、まあ本郷短歌会もありませんでしたし、それが大学院二年の春に指導教官が亡く

なって、かなり漠とした気持ちになってあつたため自分の文学志望を思い返し、一九八四年六月に竹柏会「心の花」に入会したわけです。

谷岡 そこでぼくらに会ったわけですね。

大野 最初に行った東京歌会で確か黒岩さんが司会で、二次会で谷岡さんと話したことを何となく覚えてますよ。ぼくの部屋に谷岡さんが泊まったこともありましたね。

谷岡 大野さんの部屋には信綱、マルクス、斉藤慶子の写真が貼ってあって……。

大野 それはともかく(笑)、今にして思うと良い時期に「心の花」に入ったと思いますよ。黒岩さんもインタビュールで言ってくれけど(二〇一三年十月号)、俵さんなども参加した若手勉強会がはじまって、国文社の現代歌人文庫から一人ずつ選んで、十首選をして論じ合った、そして飲み屋に場所を移して、お互いの作品を批評し合った。今でも取り出してみると、「心の花」原稿用紙に書いた作品に酒の染みがついている。

若手の勉強会はその後も断続的に続いて、今は頼綱くん、笹本さんなどと、「心の花」外の人も参加して、半月歌会という歌会をしています。スカイプというネット通